CASE 1

テキストチャットツールを活用して、教師間の情報共有と人間関係構築を促進

福井県・私立福井南高校

福井県・私立福井南高校は、2020年3月、若手教師の発案でテキストチャットツール「Google Chat」を教職員用に導入。オンライン上でコミュニケーションが活発になったことで、対面での会議のあり方や、ベテラン教師と若手・中堅教師の関係性がよりよく変化していったという。また、対面のコミュニケーションの場として夏季休業中などに開催される、教師と生徒の交流の場づくりの取り組みについても聞いた。

情報共有はチャットで行い、会議では議論に時間を割く

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、職員室内での対話の機会が制限される中、福井県・私立福井南高校では、2020年、教師間での情報共有を目的として、テキストチャットツール「Google Chat」を導入した。オンライン上でのコミュニケーションの機会の確保は、対面の会議の質を変えたと、浅井佑記範（ゆきのり）先生は振り返る。

「コロナ禍以前から、学校で行われる会議は、その数が多いだけでなく、大半の時間が、資料に書かれている内容の確認に割かれ、議論や意思決定の場になりにくいと課題を感じていました。しかし、テキストチャットツールの導入で、会議のあり方が大きく変わりました」

テキストチャットツールの導入を主導した情報科の浅井先生と高崎智裕先生は、管理職と相談した上で、議論が不要で了承を得るだけの事項は対面の会議では取り上げず、オンラインで決議することを校内に周知。会議の資料は事前にチャットに投稿して、対面の会議では資料を説明する時間を設けないようにした。

「対面の会議では、議論に時間を割けるようになりました。また、気になる生徒や活躍した生徒が話題に上る機会も増え、クラスや学年を超えた生徒理解が促進されています」（浅井先生）

対面の会議は考えを深める場だという共通認識が校内で浸透している今では、様々なチャットルームができ、会議資料の共有のほか、議論の前段階の意見交換もチャットで行われるようになった。そうした変化は、教科会や学年会にも表れており、いずれの対面の会議も内容が充実する一方で、会議そのものの時間は短縮されているという。

テキストチャットツールの便利さを実感した教師が、様々な用途でチャットルームを自主的に展開するようにもなった。

「探究学習について情報交換をする先生もいれば、大学説明会の出席者の割りあてを行う先生もいます。情報共有だけでなく、若手の先生がベテランの先生に悩みを相談するケースも少なくありません。職員室と違って、生徒やほか

進学支援担当
浅井佑記範
あさい・ゆきのり
教職歴9年。同校に赴任して10年目。地理歴史・公民科、情報科。

進学支援担当
高崎智裕
たかさき・ともひろ
教職歴5年。同校に赴任して6年目。数学科、情報科。

学校概要

設立 1995（平成7）年
形態 定時制／総合学科／共学
生徒数 1学年約80人
2022年度入試合格実績（現役のみ） 4年制大は、福井県立大、明海大、中央大、仁愛大、福井工業大、日本福祉大、京都産業大、京都女子大、京都橘大、立命館大、龍谷大、近畿大などに延べ24人が合格。

の先生が不意に入ってくることはありませんから、何でも話せる安心感があり、相談もしやすいのでしょう。ベテランの先生も、チャットは対面と異なり、熟考して丁寧に返信ができるので、相談に乗りやすいようです」（浅井先生）

チャットでの相談のしやすさがベテランと若手の距離を縮めた

テキストチャットツールの校内への浸透と、そこでのコミュニケーションの活性化について、浅井先生は、「若手の先生がベテランの先生にどんどん相談していったことが、学校全体を巻き込むことにつながった」と振り返る。

「経験豊かな先生は、ＩＣＴで他者とつながらなくても困ることはないかもしれません。そうであったとしても、悩みが多い若手の先生が率先してＩＣＴを使い、その中で様々な悩みを相談されたベテランの先生は、若手の考えを理解しながらＩＣＴツールのよさを肌で実感し、自分も使ってみようという気持ちになっていったのだと思います」

教師間の情報共有やコミュニケーションのツールとして活用が始まったテキストチャットツールだが、今では、テキストチャットツールを使う中でＩＣＴに興味を持ったベテラン教師が、自らＩＣＴについて勉強し、自身の豊富な授業実践の経験と結びつけながら、授業でのＩＣＴ活用についてのアイデアを若手に教えるといった、新たな動きも見られている。

だが、想定外の課題も見えてきたという。

「テキストチャットツールによって教師間のコミュニケーションが活発になり、教育活動や校務がスムーズに進むようになったことが、前例踏襲を助長してしまっているのかもしれないと気がつきました。同僚性を高めることで、職員室は安心・安全な場になりますが、共通認識が図られる事柄が多くなる分、新たな価値創造につながりにくくなる危険性があると思っています」（浅井先生）

浅井先生は、教師にとっての価値創造のモチベーションは生徒との対話にあると考えている。

「高崎先生が主催する『Mathカフェ』（**COLUMN参照**）や、探究学習を始めとする場で生徒と向き合うことで、学校にはどのような新しい価値の創造が求められているのかが見えてくるでしょうし、その時にこそ、教師の同僚性が真に力を発揮するはずです」

COLUMN

生徒、教師が知的な自由時間を楽しむ「校内カフェ」をオープン

2019年、数学科担当の高崎先生が、夏季休業中の補習期間の生徒の居場所として提案したのが「Mathカフェ」だ。数学など、自然科学を中心とした教師のお勧めの書籍を並べ、生徒が読書したり、自習したり、あるいは雑談を楽しんだりする場として開放した。中には、「Mathカフェに来たいから、補習は休まず行く」といった生徒もいるという。

当初、生徒のための居場所として考えた「Mathカフェ」だが、教科を超えた教師同士のつながりの場にもなっている。

「生徒の様子を見るために、多くの先生が足を運ぶうちに、他教科の先生もお勧めの書籍を紹介したり、担当の教科に関連するゲームを実施したりするようになりました。先生方にとっても、職員室とは違う、もう１つの居場所になったようで、生徒と、そして先生同士で、おしゃべりを楽しんでいます。生徒のことを理解する場としてはもちろん、英語科の先生との雑談の中で数学の教材研究のヒントをもらうなど、先生方とのコミュニケーションの中で自分の指導を見直す場にもなっています」（高崎先生）

2020年冬季休業中の「Mathカフェ」の様子。

読者の先生方へ！ ワンポイントアドバイス

テキストチャットツールの導入にあたって、**管理職から、「使える人から使い始めるのではなく、全員ができることから始めてください」と言われました。**そのため、チャットのテーマは、全員が参加することができるものから始め、使い方に慣れてから、テーマを増やしていきました。ＩＣＴの活用は、教師にとって、校務の負担の軽減やコミュニケーションの活性化の可能性を秘めていますが、みんなができることから始めて、**教師間に経験の差を生まない配慮が大切**だと思います。（浅井先生）